

中村昭之先生を送る

高橋重宏

中村先生は、1970（昭和45）年4月、本学に赴任され、爾来28年間にわたって本学の心理学研究・教育に多大な貢献をされ、平成10年3月で定年退職されることになった。この間社会学科の主任、大学院心理学研究科の専攻主任の重責を果たされた。『先生おめでとうございます』という気持ちと『残念!』という気持ちが交差し複雑である。

特に、来年開設50周年を迎える社会学科は、社会学コース、社会福祉コース、心理学コースで構成されてきた。だが、平成10年4月1日から文部省の認可を得て社会学科社会学専攻（定員70人）、社会学科社会福祉学専攻（定員70人）、心理学科（定員60人）として新たな歴史を刻むことになる。

この素地を長年築いてこられたのが中村先生である。昨年、大学主催のオープン・キャンパスに2回にわたって出席し、駒澤大学を志望する生徒や父母と接する機会があった。質問の多くは、カウンセラーになりたい、という希望であった。まさに、駒澤大学のカウンセラー養成を支えてこられたのが先生である。平成10年度の入試では新設された心理学科に2,074人もの応募が殺到している。

先生との思いでは、1983（昭和58）年に誠信書房から出版されたサルヴァドール・ミニューチン『家族と家族療法』の翻訳である（Salvador Minuchin, *Families and Family Therapy*, Harvard University Press, 1974）。当時駒澤大学教授

であった山根常男先生が中心になり、研究会を設けて翻訳がすすめられた。ミニューチンの家族療法の理論は、現在でも北米で、日本で基本的なテキストとなっている。着実に予定したスケジュールをこなしていかれる中村先生の姿に敬服していたのは私だけではなかったと思う。

これからも、健康に留意され研究を続けられるとともに、新設された心理学科を様々な形で支えていただくことを期待したい。